

## 社論：トランプの新アジア政策は日本及び台湾に有利

漢和防務評論 20170303 (抄訳)

阿部信行

(訳者コメント)

トランプ大統領の対中政策が台湾、日本にいかなる影響をもたらすか？漢和の最新記事を紹介します。

トランプ大統領の対中政策ブレーンは、すべて対中強硬派で占められ、台湾及び日本に大きな影響をもたらす可能性がある」と指摘しています。それも米国は、商人の大統領らしく、あまりお金をかけず、他国の金で中国を押さえ込もうとするのではないかと。

秋に予想される中国の十九大後、中国の軍事政策が劇的に変化する可能性がある」とも述べています。

平可夫東京

トランプと台湾総統蔡英文の電話会談は、台湾にとって大きな外交的勝利であった。トランプの対中政策は、過去 10 年来、最も現実的になる、と KDR は予測している。これは北京にとって好ましいはずがない。

KDR は再度強調する：米国の対外政策を研究すると、宗教観を無視できないことが分かる。米国はキリスト教国家である。歴代の米大統領は、すべてキリスト教信者である。ある人は新教徒であり、ある人は福音派であり、ただケネディだけが天主教であった。天主教は、当初米国で異端視された。1950 年代、60 年代に至り、天主教信者は自らの努力により、商業界で頭角を現わし逐次政治の核心に入った。

トランプは、長老派であり相当な保守勢力に属し、絶対反共の姿勢である。このことから、KDR は最初からトランプの対中政策が順調には運ばないだろうと判断した。次に、現在のトランプ指導部の人選を見ると、みな対中強硬派である。しかも最も中国を知るメンバーである。ある報道によると、マイケル・ピルブリ（中国語表記：百邦瑞）はホワイトハウスの中国問題顧問になるという。彼は、本誌総編集と 20 年来の知己である。会うたびにごとに、彼は本誌総編集を”大スパイ”と呼称した。最後に面会したのは 2016 年シンガポールのシャングリラ会議であったが長話はしなかった。彼は、米国における解放軍研究の専門家であり、本誌総編集長と研究資料を交換したことがある。彼は、中国語が流暢で、中国に対する基本認識は次のとおりである：5000 年の中国の歴史を見ると、兵（軍隊）は偽りを厭わず、欺騙する。中国人はこれを聡明な証拠と見ている。この点から、キリスト教文明とは完全に衝突する。彼は中国人の性格を正しく見ることができる米国人である、と KDR は思っている。したがって北京は、相当中国を知った米国大統領顧問と直面することになる。

北京の百邦瑞に対する印象は良くない。彼は、2006 年以前には、中国軍が主催する”孫子の兵法研究会”に毎回参加していた。2006 年に杭州で開催された同

研究会には習近平も浙江省委員会書記の身分で参加していた。本誌総編集は中国軍人に尋ねた：なぜ百邦瑞は来ないのか？と。軍事科学院の主催者は：彼は招待していない、と答えた。彼は毎回出席し、熱心に活動していた。百邦瑞は見るところ、確かに中国哲学、中国人の思考方式を熟知していた。

**KDR** がトランプのツイッターを詳細に研究したところ、2種類の基本思想が彼の対中政策を左右していることがわかった：一、商人としての利益追求であり、二、新孤立主義である。他人の金で商売し、米国のアジアにおける利益を守ることである。したがってこの主旨から言えば、トランプ時代のアジア政策は、同盟国の財政力、軍事力を最大限利用し、中国を抑制する。したがって台湾及び日本との軍事協力強化は必然となる。これがトランプと蔡英文との電話会談の意義である。しかも米国自身はあまり金を使わずに、中国を抑制することができる。これは、日本及び台湾にとってチャンスになるはずである。

現在、すでに米国が台湾との軍事交流を階層別に行う可能性についての報道がなされた。すなわち国防長官の直接会談もあり得る。トランプと蔡英文は、すでにトップレベルで直接対話しており、長官級の直接対話は当然問題がない。

トランプの対台政策で最も実際的な問題は、武器貿易の範囲を拡大すべきかどうか？輸出武器の技術水準を高めるのか？にある。**KDR** は、台湾空軍の F-16 用に AESA レーダーを輸出した事から見て、米国は対台輸出武器の技術水準を常に高めようとしている、と見ている。

台湾は、現在海軍の現代化を積極的に推進している。それにはイージス級ミサイル駆逐艦、潜水艦等の自力設計も含まれる。トランプ時代になり、台湾向けに技術提供が行われることは、トランプのすでに表れた性格に符合している。特に艦載の AESA レーダー、米国が保有する一部の潜水艦技術については問題ない。空軍の類似技術がすでに台湾に輸出されている。

トランプは中国の反応に如何に対応するか？**KDR** の観察に基づけば、トランプの内閣構成員、中国問題のブレーン、一部の台湾常駐者、一部の一生中国軍事問題を研究する者、真に北京を知る米国の中国問題専門家は、過去 30 年来、米中間の台湾及び南シナ海問題に関する摩擦の歴史を真剣に研究してきた。ある種の主流の考えは、中国を張子の虎と見る傾向がある。すなわち中国は、真に米国と対決することはできない、と。習近平は、十九大を前にして依然として多くの内部問題に直面し権力が不安定である。次に、人民解放軍の実力を過分に評価する必要はないが、低く評価する必要もない。真に海上及び空中で米軍と対峙した場合、中国は相手ではない、と。

トランプの中国問題ブレーンのリストは、ほぼ公開されている。彼らは、ツイッター及びフェイスブックを持っている。またフェイスブックで本誌総編集と友人である。彼らの言論を研究してみれば良い。本誌と完全に一致した結論を得るはずである。

**KDR** は、トランプが政権を獲り、対台政策の手始めに北京との間で発生する最大の摩擦は対台武器輸出の問題であると考えている。台湾は、長年、66 機の F-16 の獲得を希望していた。お金さえあれば、今がチャンスである。しかも F-16 BLOCK-60 は台湾に輸出されており、過去に比べ多くの障害はないはずである。その上、蔡英文の対大陸政策は、依然として北京がこころよく思っていない。

十九大以後の習近平の対台政策が逆転することは、目に見えている。トランプと蔡英文の電話交信の後、すでに多くの中国の学者が官方紙上で、対台湾の軍事演習を強化せよ、台湾を懲らしめよ、と叫んでいる。

以上